

柳田國男著

族制語彙

国書刊行会

「分類民俗語彙」の復刊にあたって

本年は、日本民俗学の祖・柳田國男の生誕一〇〇年にあたり、内外の学者を集めた国際シンポジウムが開かれた。これを期に、民俗学はさらに広い視野と質を伴った発展期を迎えようとしている。

昭和十年は、民俗学にとって記念すべき年であった。柳田國男の還暦祝を境として全国に民俗学の研究が澎湃としておこり、雑誌「民間伝承」が発刊され、地方では各地に民俗研究の同志が集まり、調査研究の報告をのせた、謄写版などの小冊子が刊行されるなど、幅広い研究活動が展開された。

今回復刻する「分類民俗語彙」一二冊は、いずれも昭和十年から約一〇年の間に刊行されたものであり、多くの研究者たちに利用されとともに、それはまさに、民俗採集に伴う研究の進展を示すものでもあった。

この「分類民俗語彙」は、柳田國男が民俗資料を採集する上で取った方法で、ことばが、過去の日本人の生活の痕をとどめておくことに着眼し、ことばを蒐集することにより、日本人の過去の生活、文化、風習等を探り、それを基に、民俗を分類整理しようとしたものである。

発刊当時、柳田國男は、日々の生活に過去の習俗を窺い見ることが不可能になってゆくことを憂慮した。今日それらの危惧は、まさに現実となって表われている。この一二冊の書は、失われた習俗を現在に伝える貴重な資料にとどまらず、柳田民俗学の精髓に迫る基本的な名著でもある。

この「分類民俗語彙」一二冊を再び世に問えることは、心からの喜びであり、同時にこれらの書が、今後の研究における糧となって活用されることを確信し、また新しい民俗語彙集への礎となれば幸いである。

はしがき

我國古來の家族制度を中心とする身分關係並に社會狀態を明かにすることは日本法理研究の上に大切なことであると考へ、本會はさきに著者の主宰される民間傳承の會に委嘱して家族制度に關する資料の蒐集整理をお願いした。

本書はその報告として齎らされたものであるが、既に同種の資料の發刊されてゐるものがあるので、讀者の便宜を考慮してそれ等と同じやうな體裁にして公にする次第である。

昭和十七年五月

日本法理研究會

自序

日本上代の政治史又は社會文化史に、氏といふものが大いに働いて居たことは誰でも知つて居るが、さてその氏は末々どうなつて來たのであらうか。言葉として今日残つて居るのは、我々の家の名を一に又氏ともいふことだけで、家の名は共通で氏は異なるといふ者が有るといふことすらも、もう考へることが出来なくなつて居る。さうして一方にはその家なるものの重要性が、少なくとも今日までは、年と共に痛切に感じられるやうになつて來て居るのである。氏と家との關係如何は、一つの大きいなる問題とならざるを得ない。氏が小さく分裂してこの多くの家になつたか。もしくは昔の氏のたゞ收縮したものが家であるのか。但しは彼と是とはには繋がり無く、別に此世の中に彼が衰へ消え、是が大いに立ち榮えるやうな、それ／＼の理由があつたものか。答へはこの三つの中のどれか一つで無ければならぬのだが、中間約千年の経過がまだ明かでないばかりに、今以て一應の假定をすら下し得ない状態に在るのである。

自分たちは恐らく何人よりも熱心に、この昔から今への推移の跡を、究めたいといふ望みを抱いて居る。永い歳月を累ねた同志多数の努力にも拘らず、今でもまだ是だけは判りましたと言ひ得るまでの、結果を収めて居らぬのは面目ないが、少なくとも我々の方法には若干の見込みがある。といふことまでは認められたやうな氣がして居る。それがこの一種の中間報告の如きものを、公表して置かうとする根本の動機である。

我々の方法といふのは大小の二つ、第一には此問題のやうに記録の史料が乏しく、多量の推測と臆斷とを備ふに非ざれば、到底文書に據つて現在までの變遷を解説することが出来ぬといふ場合には、先づ目前の社會生活事相を、曾て有つたものの保存殘留乃至は痕跡として、詳かにその甲乙丙丁の差等を見て、次々に一つ以前の姿といふものを尋ねて行かうとすることである。新しい文化様式の浸潤が土地毎に程度濃淡を異にすることが無かつたならば、次には又我同胞國民の保守性が強靱で、何か機會のあるたびにもう消えたかと思ふ昔風が、必ず再び頭を擡げるといふ特徴を具へなかつたならば、さうく遠い昔までは探ることは出来なかつたかも知れないが、幸ひにしてこの二つの點は、我々の希望して居た條件に合して居る。よその民族には見られぬやうな古い風習は、存外によく保存せ

られ、又大切な改まつた折には、久しく潜んで居たものが思ひかけず再現する。さうして國の隅々の生活ぶりは、都市の新人が想像して居る以上に、何十級と謂つてもよいほどの階級を示して居るのである。この地方的の相異を比べて見ることによつて、個々の變化の又一つ以前の姿といふものが、次々と判つて來るのである。今までは單にこの差等を比べて見ようとした人が無いのみか、寧ろ背後に在るものを氣の毒とし又は小さな現象として無視しようとした者さへあつたのである。乃ち災ひを轉じて福を爲す。それが今却つて我々の方法の爲に、或は豊富に過ぐともいつてよいほどの、色々の資料を残されて居る原因ともなつたのである。

この集の語彙を續けて見る人の、恐らく氣が付かずに居られぬであらうと思ふことは、離島に關する記事の非常に多いことで、實はたゞ偶然に斯うなつたのではあるが、自分の方法を説明するに都合がよい。島々の住民も無論すべて日本人で、中にはさう古くから、そこに移住したのでない者も多いのだが、島には屢々内陸の村々の、最も有りふれたる文化事物、新らしい生活と呼ぶるゝ幾つかの施設制度が缺けて居る。しかもその缺陷は決して空洞では無く、必ず何等かの其一つ以前のものが、立派にその場所を充たして居るので

ある。しかも島々の遠近大小、その他數知れぬ環境の差等はある。交通によつて隣の土地の感化を受けることが少なく、各自は獨立に今までの生活を續け、又それ／＼に許さるゝ限度に於て、新らしい大きな統一に参加しようとして居るので、爰に國民の歩みの後れ先だつ足取りが、鮮かに映し出されることにはなつたのである。今まではそれをたゞ一つ／＼引離して觀るだけが能であつたのが、今や改めてその遠く相隔たるものを併せ比べ、その間にどれほどの差異、又どれだけまでの埋もれたる一致が存するかを見ようとするのである。一つの珍らしいものに驚くだけは學問とは言はれぬが、知らずに過ぎ來つた共通の事實を積み重ねて、それが決して偶然の現象では有り得ないことを、我々に認めしめることは發見である。歴史の學問が之によつて、新たに一つの生面を開いたことは、もう幾つかの例を列記することが出来る。たゞ悲しむ所は計畫ある觀察が未だ行はれず、僅かに百あるものの七つか八つを知つて、残りも多分は斯うであらうといふ程度の假定に、なほ暫らく止まつて居なければならぬことである。今や國運の大飛躍に際會して、急いでこの消え又は改まらうとするものの殘影を記留し、嗣いで大いに起るべき文化史研究の地を爲さんが爲にも、極力我々はこの方法の可能性を、立證すべき必要を感ずるのである。

第二の小さい方の方法といふのは、この小冊子が示すやうに、我々國內各地の事實を比較する爲に、出来るだけ多く土地に行はれて居る言葉を利用しようとするのである。精確を期するならば名よりも實、即ち今わかつて居る限りの事實を記述し、之を排列して異同を明かにした方がよからうが、それでは非常に多くの筆を費さねばならぬばかりか、利用者の勞苦を誅求するに過ぎ、又却つて印象を淡からしめる虞れがある。故に先づ目標の語を掲げて事實の存在を明かにし、更に今後の探求に便ならしめようとして居るのである。日本の方言には、實は方言とは言へぬものが多い。中央二三の都府だけにはもう忘れられたもので、田舎には東西南北、そちこちに一致して居る言葉の多いことは、この集が最も手近なる實例であり、又是あるが爲に名だけを聽いて、直ちに内容を理解する便宜も多いのである。一つの缺點を言へば、今日の多くの方言集は、語數を貪るのみで説明が足らず、粗末な不精確な對譯を付したものが少なくない。さういふ有合せの材料も使はざるを得なかつた故に、其まゝではたゞ見當が付くといふに止まり、やはりもう一度實地に就て、聽いて確かめて來る必要が多からうと思ふ。自分がこの書の讀者に勧めたいことは、方言集だけは別にしてもよいが、他の各項に引用した書物と雑誌には、必要に應じて直接

に目を通されんことである。出来る限り誤り無く原文を要約したつもりだが、詳しい前後の状況を知つて置くには、抄録だけでは足らぬ場合が多いであらう。注記する所の引用書は、何れも近年の刊行物で、圖書館で無くとも持つて居る人は多い筈である。たゞこの以外に編者が耳で聴き、又は手帖や書信で讀んだ材料は大分多く、實は其方が概して確實であり又重要なのだが、それだけは書いても無駄だから一々出處を掲げなかつた。昭和十一年の交、日本學術振興會の援助を受けて、我々同志の者が全國數十箇所山村漁村を巡り、同じ質問を以て答へを求めて來た材料が、この中には大分まじつて居る。今後の研究者は先づ安心して是等の材料を利用せられてもよいと思ふが、我々の希望を表白するならば、大切な事項だけはもう一度、別の途から確かめて見、又能ふべくんば此書に掲げられて居ない地域から、類似の又は反對の事實を、一つでも多く聴き出して、各々關係ある頁の餘白に、書き込んで行かれんことである。斯様に煩はしいまでに多くの縣郡島名を並べてはあるが、全國の廣きに比べると、是は十分の一にも足らず、又すべての項目にわたつて、残らず調査して得たといふ土地は、一箇所も無いのである。此處に出て居ないからさういふ實例は無いのだらうといふ推定は、絶対に下すことが出来ないのである。

そこで最後にもう一つだけ説明をして置きたいことは、この語彙には縣郡名又は舊國名や地方總稱だけを掲げて、村や部落の名は出さない方針を採つたが、同じ一つの郡でも町と村、平野と山地では事情がよほどちがひ、一方は以前のまゝ、一方は全く改まつてしまつて痕跡も無いといふ場合は多いのである。それ故に某郡に斯ういふ事實があると記したのは、少なくとも其郡内に一箇所以上、最近即ち二三年前までは、たしかにさういふことが實驗せられたといふ意味で、同じ郡内の他の一部の人が全く知らなくても、事實に反するなどと言つてもらつては困るのである。それと同時にたつた一つの地方だけを擧げたとしても、勿論その郡より他には無いといふのでは決して無い。寧ろ自分は東北なら東北の一つの地方で、生活環境のほゞ相似たる土地ならば、甲の郡にあつたことは乙丙丁の郡にも大抵はあるものとさへ想像して居る。たゞ明白な證據が無い故に、成るべくは他もさうだらうといふことを言はぬだけである。地名をやたらに竝べるといふことは、其地を故郷とせぬ者には興味の無いことであり、又或は此書の印象を害するといふ人もあるか知らぬが、我々の仲間では、努めて多くの地方名を記憶することを以て、民俗研究の出発點として居る。生れた土地以外の事實を省みなかつたといふことが、近世國民教育の一つの弱點であ

り、同時に又同胞國民の生活事實を知らず、たゞ外國人の著書によつて、國の文化の現在未來を論じようとする者の、いつまでたつても跡を絶たぬ原因ではないかと思つて居る。此書の説く所が因縁となつて、一つでも多くの國內の地名が覺えられるならば、それも亦幸福なことだと言つてよい。

なほ「親子なり」と題した一章は、前年家族制度全集の中に、親分子分と題して書いたものと重複するが、其後の資料によつて増補した部分が多く、又一二の訂正もある。

昭和十七年五月

柳 田 國 男

目次

自序	巻頭
一 マキから親類まで	(一)
二 本家・分家	(三二)
三 いとこ・おやこ	(七一)
四 親子なり	(八四)
五 家長及び相續者	(一六八)
六 家族	(二〇一)
七 家族の私財	(二三四)
索引	一一三〇

一 マキから親類まで

マキ

日本の親族制度の沿革を明かにする爲に、最初に着眼すべきはマキといふ語であらう。現在この語の用法は地方的にやゝ變化し、又四國九州の如く殆ど使はぬやうになつた土地もあるが、以前は是が重要な社會組織の根幹であつた證據はなほ残つて居る。マキの本來の意味は多分たゞ「群」といふだけであつたらうが、人に在つてはそれが血筋の對立、即ち先祖を共同にするか否かによつて自他を分ち、單位を意識するやうになつたのは自然である。東京を中心とした關東一帯で、マケをたゞ或一つの系統に屬する特徴、たとへば西日本でソソとかスヂとかいふのと同じ意味に使ふのも、其根本には家の遺傳といふ考へ方がある。マキ又は一マキといふ語を、一つの血統を引いた者の全部と解する風は、弘く東北の各地にも及んで居るが、たゞ現在はもうその範圍又は限界が、必ずしも明確とは言へぬのである。是は一つにはこの語の性質が、もとゞさう複雑な内容をもたなかつたからでもあるが、又一つには世の中の進みにつれて、マキの組織が追々と弛み崩れて來た、經

過を示すものとも思はれる。

能登半島の奥地では、マクといふのが、他の地方のマキであるが、爰ではたゞ組もしくは仲間を意味し、たとへば戸主だけは年が若くても若衆組には入らず、すぐに「オヤツサン」のマクにはひる」など、謂つて居る。遠江の氣多の山村でもマキには、三通りあつて、血族地類等の広い身うちをマキといふ他に、或一區域の中に住む者の全體をマキと呼び、又は共同の仕事仲間、モヤヒの組をもマキと謂ふさうである。斯ういふのは或は此語の古い用法がまだ残つて居るものとも見られぬことは無いが、普通に同じ一族が一地に集合して住み、且つ常に作業に協力して居ることを考へると、是もやはり一門の意識が衰へて後、ただその部分的な特徴だけに、名稱を限定して用ゐて居るものらしいのである。少なくとも此地方のマキには中心となる家があつて、それを今でもマキノシンと呼んで居る。

マキは單一の中心をもつといふことが、その重要な特性の一つでは無かつたかと思ふ。然るに人の數が増殖し、生計の利益が複雑になると、先づこの原則が守りにくいものになつて来る。近畿附近のマキに就ては、百數十年前に成つた丹波志に、氷上郡本郷村の荻野氏は、荻野對馬といふ人の末で其一黨を荻野卷といひ、同じ村には又十六家の垣内氏があ

つて、其方を垣内卷（カキチマキ）といふとある。舊藩時代に各自が家名をもつて居るといふのは、單なる本家分家ではなかつたので、斯ういふのがなほ卷の名を呼ばれて居たとすると、マキには既に其中心の單一でないものが、出來て居ることも想像せられるのである。近世はそのマキといふ語も次第に行はれず、之に代つて一黨といふ語が盛んに用ゐられるかと思ふが、是にも亦家の名が同じいだけで、必ずしも有力なる本家の之を統御する者が無く、もしくは幾つかの小さな中心に分屬して居るものが多いやうである。所謂苗字を同じくする家々を合せて、之を何々マキといふ風は、今も但馬城崎郡美方郡などには残つて居る。それを一種の社會的集團と認められた報告も出て居るが（近畿民俗一卷二號）、果してどの程度にまで精確に、集團又は團體といふ名が當るであらうか。もう一度實地に就て觀なると決しかねる。たゞ部落によつてはマキの中だけで、テマガへと稱する努力の協同行はれて居るといふから（旅と傳説一二卷一〇號）、少なくとも以前の重要性が此方面からも探つて行かれるのである。

一方に多數の家々と苗字を共にするといふことも、地方の生活には小さくない心の強みであつた。明治初年の戸籍改定の際に、今まで苗字の無かつた者が幽かな緣由を言ひたて

に、附近の有力者の家の氏を名のり、抗議やわる口を投げ掛けられた話は數多く残つて居る。一つの苗字を名のつて居るといふことは、色々の除外例があつたにも拘らず、先づは共同の優れた血から岐れ、同じ一區の地を耕作して、其産穀によつて養はれた者の末だといふ推定を受けたのである。たとへ經濟上には何の支援も期し得なくなつても、この誇りと頼もしさは目に見えぬ利益であつて、是たゞ一つの爲にも集團は存立し得たであらう。苗字が平民に許されなかつた時代にも、岩手縣などにはマキ毎に揃への通稱を用ゐて、兵衛マキだの之丞マキだのと、一見してどのマキに屬するかを知るやうな名の付け方があつた（遠野物語再版三四六頁）。しかしなほ多くの類例を比べ合せて行くと、マキ結成の動機としては是はたゞ一部分で、その根底に横はる今一段と原則的なものが、次第に退縮した抜け殻の如きものであることが、追々に判つて來るやうに思ふ。

今日我々が親類と呼んで居るものと、マキとはどこが異なり、又どれだけの範圍の差があるか、是は一應考へて見る價値のある問題である。私の注意して居る點は二つ、其一つはマキが姻戚即ち女系の親族を含みぬこと、他の一つは六等親以外の遠い同系もマキの中には入つて居て、従つていつも親類よりは廣い範圍に解せられて居ることである。妻母祖

母までの里方、姉妹伯叔母までの縁付先は、以前も交通が繁く義理のつき合ひは固かつたが、もうそれ以上になると今でも疎遠になりやすい。之に對して同族は假に親等が算へられぬ程遠くなつても、なほ一定の關係を絶たぬとすると、少なくとも兩者の端々に於ては、マキと親類とは外貌が丸でちがはざるを得ないのである。上州の南甘樂などには「母方親類自分一代」といふ諺があり、しかも一方にはマキは永續のものゝやうに考へられて居る。即ち今日謂ふ所の親類ではもう無いけれども、一マキの内だといふ人が幾らでも有るわけである。

同じ考へ方は決してこゝだけではない。津輕その他の東北各地には、オヤグマキといふ語があつて、それがちやうど我々のいふ親類に該當する。即ちマキの中には別にオヤグでない者もあることを認めて居るのである。山形縣の最上郡でも、マキ又はマキタテといふのは、オヤグ又はイツケよりも範圍が広く、同じ血筋から岐れた家のすべて、血縁を引く者の限りは皆含まれる。だから其中には葬式にも來ぬやうなマキタテも有ると謂つて居る。マキの結合が最初から此様に弛んだものだつたら、特に其爲に一つの名稱は生れなかつたらう。察するに是は家數が多くなり、又は居住地が分散してしまつて、一個の集團として